
 学 会 記 事

第52回新潟内分泌代謝同好会

日 時 平成元年10月7日(土)
午後2時開会
会 場 新潟厚生年金会館

I. 一般演題

1) Contracture in flexion をきたした ACTH 単独欠損症の1例

佐藤 正久・近藤 浩
柳沢 勝彦・若松 延昭 (新潟大学脳研究所)
宮武 正 (神経内科)
谷 長行 (同 第一内科)

2) 乳汁分泌を伴った Gliomatosis Cerebri の1症例

荒川 直子・吉岡 光明
山川 能夫・斉藤 秀晃 (新潟県立中央病院)
土田 正 (内科・脳神経外科)

症例は52才女性(閉経50才)。1987年12月より筋収縮性頭痛として Etizolam (Depas[®]) 1.5-2mg/日で治療を受けた。1989年5月 MRI-CT で両側大脳半球白質から基底核周辺にびまん性浸潤性の異常陰影が認められ、Gliomatosis Cerebri が疑われた。脳梁よりの生検にて同症と診断された。経過中、一過性に Galactorrhea が認められた。Etizolam 投与中の1989年1月、PRL が基礎値 30ng/ml と軽度上昇し TRH 試験にて頂値 374 ng/ml と過剰反応を示した。4月に同剤を中止し、5月の同試験では基礎値 12ng/ml、頂値 55.1ng/ml と正常化している。同時に施行した LH-RH 試験、インスリン負荷試験、メトピロン試験で TSH・GH・LH・FSH・ACTH に異常は認められなかった。本症における一過性高 PRL 血症の原因として、Gliomatosis Cerebri による視床下部障害と、Etizolam の関与が示唆された。

3) 巨大下垂体腺腫の臨床的検討

黒木 瑞雄・田中 隆一 (新潟大学脳神経)
田村 哲郎・横山 元晴 (外科)

(目的) 当科における CT 導入後の下垂体腺腫 236 例中、巨大腺腫 11 例 (4.6%) を対象とし、その臨床的検討を行なった。(対象) 内訳は非機能性下垂体腺腫 7 例、

プロラクチノーマ 4 例で、男性 7 例、女性 4 例、年齢は 13~64 才であった。(結果) 全例が視力視野障害を初発症状とし、その他に精神症状 3 例、片麻痺 2 例、脳圧亢進症状 1 例を入院時に認めた。乳漏、性欲低下等の内分泌症状は 4 例に認めたが、汎下垂体機能低下例は認めなかった。手術は開頭術、経蝶形骨洞手術、乃至両者の組み合わせで延べ 13 回行われたが、手術合併症は開頭術で多く認められた。また視機能の改善は 3/11 例 (27%) に留まり、開頭術施行例では逆に悪化例もみられた。術後、残存腫瘍に対して 10 例に放射線治療を行い、またプロラクチノーマに対してはプロモクリプチンを併用した。現在まで、6 例がホルモン補充療法を必要としているが、全例有為な生活を送っている。

4) 特発性副腎皮質過形成によると思われるクッシング症候群の1例

—血中 ACTH 値の意義—

金子 兼三 (長岡赤十字病院内科)
棒 彰 (済生会三条病院内科)

症例は 23 才、女。18 才頃より典型的なクッシング徴候出現、増強し、腰痛を契機にクッシング症候群を疑われて昭 63.11 当院に入院。血中コルチゾール (F) 15~26 μ g/dl で日内変動なく、尿 17OHCs 16~19, 17KS 20~22mg/日。SU 試験で軽度の上昇反応を示し、Dexa (8mg, 2日間) 抑制試験で抑制不十分。副腎シンチで両側に集積像 (+) で、CT で両側副腎は正常像。血中 ACTH は、大塚アッセイ測定では basal は全て 10pg/ml 以下で、CRF, L-8-V テストで無反応、同一検体の三菱油化測定では basal 46~100pg/ml の有意の値を示し、CRF, L-8-V テストで無反応と異なる値を示し、判定に難渋した。以上より、本例の病型として ① 原発性副腎皮質過形成、② 自律性の強い ACTH 産生下垂体微小腺腫が考えられたが、CT で下垂体腫瘍像を証明し得なかったため、① を考えて平 1, 1, 9 左副腎を全摘出した (組織像は simple hyperplasia)。術後 H1.11 まで F, 尿中ステロイドは正常域で ACTH の上昇なし。今後も経過観察が必要である。

5) Liddle 症候群が疑われた1例

星山 真理・生垣 浩 (柏崎中央病院内科)
高峰 利充 (同 泌尿器科)
小黒 元夫 (小黒内科医院)

症例: 79 才、男性。主訴: 易疲労感と下肢脱力感。家族歴: 母親が胃癌で死亡。兄が高血圧・脳出血で死亡。